

111 逆立ち幽霊

昔々、首里であつたことではありますが、逆立ち幽霊というのがありました。この逆立ち幽霊というものは、実はチルーという女とカナーという男の夫婦が住んでおりまして。二人は非常に仲がよくて、夫婦の間は非常に芳しいお話がたくさんあつたらしいですけれども。

ある日のこと、このカナーフィーが病気に罹りまして、長い間床に就いておつたそうですが。その代わりまた、チルーという家内はべっぴんで、村一番のべっぴんだつたらしいです。それでこの、カナーフィーは、「私が死んだら、お前はまたほかの男と結婚するんだなあ」と言うて、いつでももう口癖のように言うもんですから、

「そうじゃないさ」と言うて、言いますけれども、口癖のようにもう。あまり家内がきれいなもんだから、そう言うておつたらしいです。そのチルーはもう、自分はべっぴんじゃあるけれども、こんなにまで自分

の夫が、死んで行つたらどうこうと話までするぐらいだから、

「もうやむを得ない」と言うて、剃刀で鼻を切り落としたらしいですね。そうしたところが、そのカナーはその鼻を見て、今度はあきれ果ててしまつて。鼻がないもんだからあきれてしまつて、見向きもしない、話もしないという具合になつて。毎日の生活をやつておつたらしいですが、これではいけないというので、チルーは心配して、

「私がこんなにまで夫のことを愛しておるのに、こんなにまでされては困る」と言うて、今度は、おるうちに、そのチルーはとうとうこの世を去つてしまつたらしいです。

いや、この世を去らないうちに、

「お前は自分の家内じゃない」と言うて、そういう姿になつたもんだから、お前は私の家内じゃないと言うて、またよそから女を見つけてきて、そして、自分の家の中に入れて、チルーはもう見向きもしなかったという話です。

それで、そうこうしているうちに、そのチルーもこ

の世を去ってしまった。そのチルーは幽霊になって、毎晩カナーのおるところに幽霊に化けて出てきたものだから、このカナーは、これじゃいけないというので、お寺に行つて守り札ですね、守り札を買ってきて、家の真正面、家の真ん中にそのフー札（符札・護符）というものを貼つておいたもんだから、恐れてチルーはその家の中に入ることができない。それで、逆立ち幽霊になつて来るけれども、どうしてもその家の中へ入ることができない。

そうして、世間を騒がしたもんだから、イチグシクペーチン（池城親雲上）という侍がそのお話を聞いて、この逆立ち幽霊に会つて、

「どうしてお前は逆立ち幽霊になつて世間の人を騒がしておるか」と言うて、お尋ねになつたところが、「実はこういうこと、自分は鼻までも落としてあれに自分の真心を訴えたんだけど、私の真心もわからないで、私がおる家にも、よそから女を連れて来て、こういうふうなことを行動しております」と。それで、こいつは是非取つてやらにやらんと思つて、その家に行くんだけど、不幸にし

てそこにフー札を貼つてあると。フー札を貼つてあるもんだから、その家の中に入ることができません。どうぞお願いです、そのフー札を取つて下さい。あんた、もぎ取つて下さい」と、言うてお願いしたもんだから、「そうか、そんな事情があつたのか。それじゃそのフー札を取るから、そのカナーをお前がどうかせよ」と言うて、その池城親雲上イチグシクペーチンがその家に来て、そのフー札を取つてしまった。みなこう、もぎ取つてしまった。そうしたもんだから、その逆立ち幽霊のチルーは、家の中に入つて来て、カナーを荒いそぶりであったという話ですね。

とうとうその、フー札がないお蔭で、そのチルーはカナーのところに入つて行つて、そのカナーを、この世を去るようになつたと。それからもう、逆立ち幽霊というのは出なかつたというお話です。

字照屋 上江洲由豊

類話

字束里 玉城佐一郎（東辺名区）